

音楽－２（第４学年） 体を動かす活動によって、楽曲の特徴に気付かせる事例
【学習活動の概要】

1 題材名 音楽を体で感じ取ろう		
2 題材の目標 感じ取ったことを体の動きや言葉で表す活動を通して、歌詞の内容や曲想にふさわしい表現を工夫して歌ったり、楽曲の特徴に気づき、味わって聴いたりする。		
3 評価規準 【音楽への関心・意欲・態度】 感じ取ったことを体の動きや言葉で表わすなどして、表現を工夫して歌ったり、楽曲の特徴に気付いて聴いたりする学習に進んで取り組もうとしている。 【音楽表現の創意工夫】 「世界中の子どもたちが」の旋律、強弱、調、反復などを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、歌詞の内容、曲想にふさわしい表現を工夫し、どのように歌うかについて自分の考えや願い、意図をもっている。 【音楽表現の技能】 歌詞の内容、曲想にふさわしい表現で歌っている。 【鑑賞の能力】 速度の変化や曲想とその変化などから、感じ取ったことを体の動きや言葉で表すなどして、「カリンカ」の特徴や演奏のよさに気付いて聴いている。		
4 題材 本題材は、楽曲全体の構成や曲想の変化を感じ取りやすい楽曲を取り上げ、歌唱と鑑賞の活動を関連付けたものである。歌唱の学習では、「世界中の子どもたちが」（新沢としひこ作詞、中川ひろたか作曲）を教材とする。楽曲全体の構成はA B Aからなり、A部とB部では調が部分的に変化する。鑑賞の学習では、ロシア民謡の「カリンカ」（楽団カチューシャ訳詞、ロシア民謡）を教材とする。取り扱う演奏は、楽曲全体の構成がA B Aからなり、反復される旋律が速度を増していき切迫感を感じさせる部分（A部）と、穏やかな感じがする部分（B部）とが対照的である。 本題材では、感じ取ったことを体の動きで表す活動の展開において、発問を工夫することで聴き取り感じ取ったことの言語化を促す。そのような言語活動が、曲想にふさわしい表現を工夫して歌ったり、楽曲の特徴や演奏のよさに気づき、味わって聴く学習に効果的に働くことを企図している。		
5 主な学習活動 (1) 題材の展開（全４時間）		
	学習活動	言語活動に関する指導上の留意点
第一次 (3時間)	①「世界中の子どもたち」のはじめの部分（A部）を、体の動きで表す。 ②「世界中の子どもたち」の中の部分（B部）を、体の動きで表す。 ③A部とB部の曲想の違いを、体の動きの違いから感じ取る。 ④「世界中の子どもたち」の終わりの部分を体の動きで表し、A部が再現され、A A B Aになっていくことに気付く。 ⑤A部とB部の曲想の変化にふさわしい表現を工夫して歌う。	・「どうしてそのような動きを考えたのか」その理由を音楽から考えるよう促す。 ・「A部とB部の動きがどのように変化したのか」について、その理由を音楽から考えるよう促す。 ・A部の動きを考える際に、「はじめの旋律がまた出てきたので同じ動きにしよう」といった児童の発言をとらえ、A A B Aの反復について気付いたことを話し合うようにする。
第二次 (1時間) （本時）	①「カリンカ」を鑑賞し、速度の変化、反復など働きが生み出す曲想とその変化を感じ取る。 ②「カリンカ」全体を味わって聴く。	・「速さはどうなりましたか」という発問はしない。体の動きを伴った活動をすることで、速度の変化に気付かせ、そのことを言語化させるように発問を工夫する。
(2) 本時の学習（4／4時間） ①目標 体を動かしたり言葉で表したりして、「カリンカ」の特徴や演奏のよさに気付くようにする。 ②本時の展開 ○「カリンカ」のはじめの部分（A部）を4拍子の指揮のような活動をしながら聴く。 ○A部のだんだん速くなる場所の面白さに気付く。 ○A部から中の部分（B部）までを通して聴く。B部は自由に体を動かしながら聴く。 ○B部の続きの音楽がどのような音楽なのかを想像する。 ○「カリンカ」全体を味わって聴く。		

【解説】

【指導事例と学習指導要領との関連】

小学校学習指導要領 第2章 第6節 音楽 [第3学年及び第4学年]の「B鑑賞」の(1)のウでは、「楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏のよさに気付くこと。」と示している。また「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の2の(1)では、「各学年の『A表現』及び『B鑑賞』の指導に当たっては、音楽との一体感を味わい、想像力を働かせて音楽とかわかることができるよう、指導のねらいに即して体を動かす活動を取り入れること。」と示している。

「楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして」の「など」には、体の動き、絵、音などで表すことなどが含まれる。楽曲の特徴や演奏のよさに気付くためには、言葉だけでなく、絵と言葉、体の動きと言葉など他の表現方法と関連付けることが効果的な場合がある。

本事例では、言葉と関連付けながら「体を動かす活動」を多く取り入れているが、体を動かすこと自体をねらいとするのではなく、音楽を豊かに感じ取るための体験活動であることに留意する必要がある。

これまでの鑑賞の学習においても、楽曲を聴いた感想や思い浮かべた情景などを自由に文章にして表したり話し合ったりする言語活動が多く見られた。しかし、それは児童が自由に感じ取ったことのみを表出することが多かったため、個々の楽曲を特徴付ける要素の働きなど、共通に学ぶべき内容が十分に定着しないこともあった。

本事例では、鑑賞の学習において、体の動きを取り入れたり、効果的な発問を工夫したりすることを通して、速度の変化など「カリнка」を特徴付ける要素の働きについて、児童が自ら気付いていけるような場面を設定した。

【言語活動の充実の工夫】一体の動きの変化をとらえて適切な発問を工夫する一

「カリнка」のはじめの部分（A部）を4拍子の指揮をしながら聴かせる。すると、だんだん音楽が速くなり、4拍子の指揮をするのが困難になってくる。児童は、指揮が正確にできなくなることがむしろ楽しく感じ、思わず笑みがこぼれる。A部が終わったところで、一度CDを止めて、次のように発問する。

「みんなニコニコしているけれど、どうしてかな？」

すると、児童は「だって、だんだん速くなって指揮がついていけなくなる。それが面白い」と発言する。体の動きを伴うことで、音楽がだんだん速くなることを実感し、そのことが音楽を面白くさせていることに気付いて発言している。その発言は、「なぜ笑っているのか」という教師の間接的な発問によって生まれている。



次に、この音楽に続きがあることを知らせ、新しい音楽（B部）が聞こえたら指揮はやめて思い思いの動きをしながら聴くよう指示する。実際に音楽を聴かせ、B部のところにくると、曲想が変わってゆったりした音楽になる。児童は指揮をやめてゆったりした音楽に合うような動き（多くの児童は腕を横にフラダンスのようにゆっくり動かしていた）を即興的につくって表現している。B部が終わったところで再び音楽を止める。教師は次のように発問する。

「どうして新しい動きは、そういう動き（横揺れ）になったのかな」

すると「はじめの部分とは全然違って音楽がゆったりした感じになるから」という旨の答えが返ってくる。

さらに、この音楽にはまだ続きがあることを知らせる。ここで最後の発問をする。

「次はどんな音楽がやってくると思う？」

すると、児童は「はじめの部分がもどってくると思う」「またゆったりした音楽がくると思う」「新しい音楽がくると思う」と、大別して3つの発言をした。

このように本時の活動では、鑑賞の学習に体の動きを取り入れ、加えて発問の工夫をすることで、児童が音楽を聴いて感じたことをそのまま言語にして表現できるように工夫した。本時の最後には、体を動かさずに全曲を鑑賞した。その後、鑑賞カードに「カリнка」の面白いところをメモしたが、教師が授業でねらいと定めた「速度の変化」や「曲想の変化」、「旋律の反復（再現）」などのキーワードを基に、児童それぞれが感じ取った音楽の面白さが鑑賞カードに書かれていた。

体を動かしているとき（特に即興的に動いているとき）には、児童は直感的に動いていることが多い。言い換えれば無意識のうちに動いている。その際、教師が「なぜそのような動いているのか」を児童に問いかけることで、児童はその理由を意識的に音楽の中に求めるようになる。

このように、体の動きを手がかりに児童の思考を促す発問を工夫することが、言語活動を充実させるポイントの一つであると考えられる。